

ひ、小なるに儀といふ。禮をつくす儀容。禮の儀制。作法(分)。禮。禮式。[シ]やき(謝儀)に同じ。[醒睡笑]禮儀、いかほど入り候はんや。

禮儀三百、威儀三千[句]『中庸』に「儀儀大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人一而後行、故曰、苟不至德、至道不凝焉」とあり。禮の簡條は、大體に於て三百、その細目に至りては、三千もありとて、支那周代の敬禮の儀制の整へるを形容していひし語。

禮儀も事に依る[句]いかに禮儀なればとて、事と場合とを考へてすべし。[諺語]

れいき令儀[名]うるはしき儀容。れいきり靈柩[名]死體を入れてあるひつき。

れいきん禮金[名]謝禮として贈る金。れいきん靈寓[名]れいてう(靈鳥)に同じ。

れいきん萬禁[名]げんきん(嚴禁)に同じ。れいきん禮銀[名]れいきん(禮金)に同じ。[徳川時代の語]。標榜比事、當分の靈銀として、十枚これれ。

れいきやう靈香[名]れいかう(靈香)に同じ。講曲羽衣。靈香、四方に薫(じ)す。れいきやう萬鄉[名]「地」支那楚の苦縣に屬せし鄉。苦縣の故城は、今の河南省歸德府鹿邑縣の東十支里にありと稱し、郷中の曲仁里は老子の故里なりきとて、後世、その地に就きて、祠廟を起し、太清宮といふ。もうけん(蒙縣)参照。繁發記「守二謙遜於萬鄉之訓、樂二開放於射山之屬」。

れいきやく冷却冷卻[名]「卻は助字」冷ゆること、又、冷やすこと。れいきやく冷却機[名]「英 Refrigerator」人工的に熱を減じて、冷却又は凍結せしむる機械。多くは、或液體を氣化せしめ、その氣化に要する潛熱を、冷却せんとする物品より吸収せしむる装置をなす。無水炭酸、無水アンモニヤ、エテ

ル或は鹽化メタル等を、二重の管の内管内に通じ、内、外兩管の間に冷水を通じて、前者を一旦液化せしめたる上、壓力を減じて、氣化器又は冷藏庫内に入る時、氣化するやうにす。

れいきよ圍園圍園[名]「園は領管領の領にて、統へくる義」、園は禦、囚徒を領録して、禁禦する義。らうや。ひとや。獄舎。[常樂]に同じ。

れいきりてん禮儀類典[名]「書」古今の記録數部の内より、朝廷の禮法儀式に關する事項を類聚せるもの。五百十卷別に序目二卷、圖十六卷。徳川光圀の、學者を彰考館に集めて編纂せしめしもの。書名は、靈元上皇の御覽に供せし際賜はりしものとす。

れいゝ靈區[名]れいち(靈地)に同じ。れいゝ靈供[名]佛前又は死者の靈前に供ふる齋食(じ)。[句]佳句。

れいゝ麗句[名]「つゝ」(對句)に同じ。れいゝ靈供[名]「れいゝ」(靈供)に同じ。

れいゝ禮遇[名]「禮」を以て禮遇すること、又その待遇。厚遇。禮接。禮待。[法]皇室より受くる特別なる待遇。有爵者はその爵に相當する禮遇、その婦は夫の爵に相當する禮遇、有爵者の曾祖父・祖父・爵を襲ぐことを得べき相續人及びその嫡長男子、嫡出の男子を缺く時は、庶長男子、戸主たりし者及びこれらの者の配遇者は、華族又はこれと同一の禮遇を受け、從四位以上の有位者も、爵に准じて、禮遇を受く。

禮遇禁止[句]華族又は朝鮮貴族たる禮遇を禁止すること。死刑又は懲役に處せられたる有爵者の婦、禁錮又は禁獄の刑に處せられ、又は、甚しく華族又は貴族の體面を汚したる華族、その他、華族の禮遇を享くる者などに對する罰則にして、特旨を以て解除せらるるに非ざる以上は、終身禮遇を享くるる能はざるものとす。

禮遇停止[句]華族又は朝鮮貴族たる禮遇を停止すること。心神の喪失又はその耗弱なる者、破産の宣告を受けたる者、勾留狀を執行せられたる者、華族又は貴族たる體面を汚辱する行爲ある者等に對する罰則にして、或期間又は或事項の消滅又は到來する時は、停止を解除せらる。

れいゝ冷遇[名]冷淡に待遇すること、又その待遇。款待せぬこと。薄遇。薄待。冷待。

れいゝ靈窟[名]靈神・靈佛などを安置せる土窟又は石窟。靈室。靈社。靈寺。平靈。叡山は、……、佛法築目の靈窟として、久しく鎮護國家の道場に備ふ。

れいゝ冷燻法[名]燻製法の一種。鹽氣を強くし、六七十度の溫度にて、二三週間に涉りて燻蒸すること。防腐劑、よく内部に浸潤して、貯藏の目的を完全に達することを得。[溫燻法に對して]

れいゝ靈化[名]「英 Spiritualization」靈感によりて、事件・題材に、靈妙なる力を興ふること。

れいゝ例會[名]日を定めて毎月れいゝ冷灰[名]火氣失せて冷えたる灰。死灰。

れいゝ靈怪[名]不思議に怪しきこと、又そのもの。[外]格外。れいゝ例外[名]通例以外。規則外。れいゝ例外法[名]「法」例外の場合なる事項・場所又は人にのみ適用する法令。特別法。(原則法に對して)

れいゝ靈光[名]「尊く」不思議なる光。[佛]人人固有の佛性(ぼつ)の、光明を放つもの。れいゝ靈光門徒[名]「佛」きやうだうは(鏡道派)に同じ。

れいゝ藜菴[名]「あかざと、豆の葉と。[植]れいてう(藜菴)の誤。平家「風箏屋は空し、草、瀧淵が巷(ぎやう)に繁し、藜菴、深く鎖せし、雨、原憲が樞(し)を濕すともいひつべし」。

れいゝ藜菴(藥)「モウ」[句]「韓非子の五蘊篇

に「藜菴之食、藜菴之羹」とあり「あかざと」豆の葉との羹。れいかう(藜菴)参照。れいゝ伶官[名]「がくわん(樂官)に同じ。[職]「溫官に對して」

れいゝ冷官[名]役徳の無き官。冷れいゝ禮冠[名]「らいゝわん(禮冠)を見よ。れいゝ令兄[名]「令はよき義」他人の兄の敬稱。(令弟に對して)「じ」。れいゝ令閨[名]「れいゝ令妻」に同じ。れいゝ鈴契[名]「騾鈴」と關契と。れいゝ麗景殿[名]平安京の大内裡の殿舎の一。綾綺殿の北、宣耀殿の南、承香殿の東北に位し、西、弘徽殿に對し、後宮の一に屬し、皇后・中宮・女御等の御在所に充てられたり。

れいゝ冷血[名]「體温の、外氣よりひやかかなること。(溫血に對して)「温請の缺けであること。冷降」。れいゝ令月[名]「めてたき月」。[令月吉日]。[陰曆]二月の異稱。

れいゝ冷月[名]陰曆七月の異稱。れいゝ例月[名]「いつの月も、同じやうに行ふこと。つきなみ。毎月。れいゝ冷血動物[名]「[動]「獨 Kalthüter」體温が外氣より高からざる動物の總稱。即ち爬蟲類・魚類など。(溫血動物に對して)「熱情なき人、冷酷なる人を罵りていふ語。

れいゝ靈劍[名]靈異なる劍。れいゝ靈驗[名]神佛の、尊く不可思議なる應驗、祈誓に對する靈妙なる効驗。利益の。りやうげん。禁秘抄、此琵琶靈驗、内裏焼亡之時、飛出」。

れいゝ令嚴[名]「令はよき義、げんぶ(嚴父)参照」他人の父の敬稱。令尊。尊大人。(令慈に對して)「る言葉。れいゝ例言[名]「書物の凡例に述べ、人々は皆善なりとていへりとも、又、元は元首の元なれば、黎首、黔首と同義の語なりともいふ」れいゝ黎氏(黎氏)に同じ。

れいゝ令尊[名]「令はよき義、げんぶ(嚴父)参照」他人の父の敬稱。令尊。尊大人。(令慈に對して)「る言葉。れいゝ例言[名]「書物の凡例に述べ、人々は皆善なりとていへりとも、又、元は元首の元なれば、黎首、黔首と同義の語なりともいふ」れいゝ黎氏(黎氏)に同じ。

れいゝ令尊[名]「令はよき義、げんぶ(嚴父)参照」他人の父の敬稱。令尊。尊大人。(令慈に對して)「る言葉。れいゝ例言[名]「書物の凡例に述べ、人々は皆善なりとていへりとも、又、元は元首の元なれば、黎首、黔首と同義の語なりともいふ」れいゝ黎氏(黎氏)に同じ。

れいゝ

れいゝ

れいゝ

れいゝ

れいげん

れいげん 例減 [名] 減 [名] の特典を適用したる減罪。 [レ]。
れいげん 厲威 [名] げんれい (嚴厲) に同

れいげん 鶴原 [名] 次條を見よ。
れいげん 鶴原 (ハ) の情 [名] 『詩經の小雅常棣篇に「鶴在在原、兄弟急難」とあるに本

れいげん 兄弟相愛する情。
れいげん 元天皇 [名] 『人第百十三代の天皇。御名は識仁(シ)』。後水尾天皇第十六の皇子。御母は藤原國子。御在位二十四年(紀元二二二三年一三三四年)。享保十七年崩す。壽七十九。
れいげん 冷語 [名] 冷淡なる言葉。冷笑する語。ひやかしことば。

れいげん 例貢 [名] 王朝時代の、諸國よりの常例の貢進。例進。(別貢に對して)
れいげん 冷酷 [名] 慘酷といふべきほどに冷淡なること。少しも愛情の無きこと。酷薄。

れいげん 例刻 [名] いつもの時刻。例 [レ]。
れいげん 禮拵 [名] 禮裝をととのふること。築様袴袴門松「さあ、さあ、七つでもあらう。おれは、そるそる禮ごしらへ、稻でもつめと、手を引かれ」
れいげん 靈魂 [名] たまたま。たましひ。魂。魄。こりやう。

れいげん 不滅 [名] 人の肉體は枯死して、靈魂は、永遠に生存すといふこと。
れいげん 遊離 [名] 靈魂遊離説 [名] 『折』靈魂は肉體より離れて自由になる好む所に遊行すと主張する説。

れいげん 創造説 [名] 『宗』『英 Creationism』基督教に於ける、靈魂の起原に關する、神學上の一説。吾人の肉體は、両親の肉體より生じたものなれども、靈魂は、出産の瞬間又はその少し以前に、神が「一創造して、肉體の中に宿らしむるものなり」といふ説。精神創造説。(靈魂前生説、靈魂生殖説に對して)

れいげん 靈魂生殖説 [名] 『宗』『英 Inductivism』基督教に於ける、靈魂の起原に關する、神學上の一説。

れいげん

れいげん 肉體は勿論、靈魂も、生殖作用によりて發生するものにて、神の創造の業は、舊約聖書創生記に記せる、第六日の人體創造に於て結了せりとするもの。精神生殖説。(靈魂創造説、靈魂前生説に對して)

れいげん 靈魂説 [名] 『折』『魂』(靈魂説)に同じ。

れいげん 前生説 [名] 『宗』『英 Theory of preexistence』基督教に於ける、靈魂の起原に關する神學上の一説。靈魂は、前生の業(カ)により、現世に轉生して、肉體に宿れりといふもの。靈魂輪廻説。精神前生説。精神輪廻説。(靈魂生殖説、靈魂創造説に對して)

れいげん 不滅説 [名] 『英 Immortality of the soul』靈魂の不滅を主張する説。
れいげん 輪廻説 [名] 『英 Theory of metempsychosis』(靈魂前生説)に同じ。

れいげん 靈告 [名] たぐせん(託宣)に同じ。正統記、八幡は垂迹(タ)の號なり。大安寺の僧行教字佐に詣てたりしに、靈告ありて、今の男山石清水(タ)に遷りましさい。
れいげん 例祭 [名] 常に定まりて行はるる祭。各神社にて、一年に一度づつ行ふ恒例の祭禮。

れいげん 靈祭 [名] 神靈又は死者の靈を祭ること。神道にて、死者の靈魂を祭ること。即ち靈前祭と墓前祭との總稱。兩者共に、先づ葬儀を行ひたる翌日行ひ、その後は、十日、二十日、三十日、四日、五十日、百日等、又、一年、二年、三年、四年、五年、十年、二十年、三十年、四十年、五十年、百年等にも行ふ。みたままつり。

れいげん 令妻 [名] よき妻。他人の妻の敬稱。令室。令閨。
れいげん 零細 [名] こまかなること。微 [レ]。雪花零碎逐年滅、煙葉疎疎隨分新」とあり「零(ち)て碎くること。こまかにくだくだしきこと、又その物。

れいげん 靈庫 [名] 室内の温度を外界のよりも一層低温ならしめて、物の腐敗を防ぐ装置をなせる倉庫。室内を低温ならしむるには、普通冷却機を用ひて、室内に配置せる管の内に、冷却せる液體を循環せしむるか、又は、冷却せる空氣を室内に導く方法を取る。

れいげん

れいげん 靈庫 [名] 室内の温度を外界のよりも一層低温ならしめて、物の腐敗を防ぐ装置をなせる倉庫。室内を低温ならしむるには、普通冷却機を用ひて、室内に配置せる管の内に、冷却せる液體を循環せしむるか、又は、冷却せる空氣を室内に導く方法を取る。

れいげん 冷藏箱 [名] 家庭に於ける冷藏用として、最上の引出に氷を入れて、空氣を冷やすやうにしたる箱。

れいげん 靈利 [名] 靈(靈寺)に同じ。
れいげん 靈札 [名] みたましろ(御靈代)に同じ。

れいげん 例様 [名] いつものさま。尋常のさま。れいやう。常態。竹馬かぐや姫すゑんには、例さまにはみにくしと宣ひたり。殊にしつらひしたれば、例さまならぬも、をかし。
れいげん 禮參 [名] れいまり(禮參)に同じ。
れいげん 靈山 [名] 神佛などを安置せる山。靈地たる山。靈峯。

れいげん 靈芝 [名] 靈芝(靈芝)に同じ。
れいげん 靈時 [名] まつりには。祭場。靈場。齋庭。

れいげん

れいげん 令旨 [名] 『金史の章宗紀に見ゆ』皇后又は皇太后の命令。懿旨。
れいげん 令嗣 [名] 令はよき義。他人の跡取(タ)の敬稱。御よつき。

れいげん 令姊 [名] 令はよき義。他人の姊の敬稱。(令妹に對して)

れいげん 令子 [名] れいそく(令息)に同じ。
れいげん 令史 [名] りやうし(令史)を見よ。
れいげん 靈齒 [名] よはひ。とし。
れいげん 靈祀 [名] 神靈又は死者の靈を祀ること。

れいげん 靈洞 [名] 靈驗著しきほこら。靈場。齋庭。
れいげん 靈時 [名] まつりには。祭場。靈場。齋庭。

れいげん 靈芝 [名] 靈芝(靈芝)に同じ。
れいげん 靈時 [名] まつりには。祭場。靈場。齋庭。



(れい)

立ちて皇后となる。後二條天皇の御准母。徳治二年崩す。御年三十八。
れいじつ 例時(向) 例刻(例)に同じ。[佛]寺院にて、夕刻、時を定めて、阿彌陀經を誦誦し、引聲(引聲)念佛を唱ふる勤行(勤行)。叡山の常行念佛より出てもといふ。天台宗にては、朝は懺悔法(懺悔)の稱あり。例時作法、著聞。[例時の程ににければ、寺へ出てぬ。例時果てて、僧ども出でけるに。]

れいじつ 令慈(名) 令はよき義。ほ(慈母)参照。他人の母の敬稱。母堂。令母。令堂。萱堂(令殿に對して)。「までの間。」
れいじつ 零時(名) 十二時より一時になる。
れいじつ 靈璽(名) 靈璽(御璽)に同じ。
れいじつ 靈代(名) 靈代(御靈代)に同じ。
れいじつ 靈寺(名) 靈佛を安置せる寺。靈

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。
れいじつ 靈字(名) 靈字(御字)に同じ。

れいじつ 靈室(名) 靈神・靈佛を安置せる屋室。靈寺。靈室。靈窟。靈堂。靈寮。靈記。嗚呼、この伽藍を、忽ちに灰となさん事の悲しきよ……いかでか、國家守護の靈室を失ふべき。

れいじつ 例日(名) いづの日も、同じやうに行ふこと。れいじつ。[同じ]。
れいじつ 冷汁(名) いやしる(冷汁)に同じ。
れいじつ 麗日(名) うららかなる日。
れいじつ 令辰(名) かしん(佳辰)に同じ。
れいじつ 靈辰(名) 正月七日の稱。人日。[命日。忌日。]

れいじつ 例進(名) 例進(例貢)に同じ。
れいじつ 麗人(名) びじん(美人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。
れいじつ 伶人(名) 伶人(伶人)に同じ。

至五六尺、概形、鳥頭(鳥頭)に酷似す。葉は互生して、掌狀に分裂し、上部には葉柄なく、下部には長葉柄を具ふ。鳥頭狀の萼を有する不整齊花、總狀花序をなして開く。山地に自生し、有毒なり。しんげう。はかりぐさ。ひよこさう。つがりぐさ。

れいじつ 靈車(名) 柩をのする車。喪車。輜車(輜車)。靈柩車。
れいじつ 靈社(名) 靈神を安置せるやしろ。靈驗ある神社。靈祠。太平真奇。特無雙の靈社なり。[先祖の靈を祀れる所。靈廟。[神道の下部(下部)家にて、生人に授くる靈號に添ふる語。]

れいじつ 靈合(名) 靈魂を祀れる所。たまや。廟。靈堂。
れいじつ 禮者(名) 年禮のために、知人の家をまはりある人。年賀の客。[方赤鳥生酔の禮者を見れば大道を横断かひに春は來にけり]。
れいじつ 禮謝(名) 忝き由を述ぶること。禮をいふこと。[藁又は寢床。]

れいじつ 禮床(名) ひややかなる寢たる手紙。禮狀(名) 謝禮の意を述べたる手紙。禮讓(名) 禮を正しくして、他人にへりくだること。退讓。謙讓。
れいじつ 令狀(名) 命令の意を記したる書狀。命令書。[法]公力を以て、被告人に出廷を促し又はこれを拘禁するために發する命令狀(即ち豫審判事、受託判事の發する召喚狀、拘引狀、拘留狀、及び檢事の發する逮捕狀の總稱。]

れいじつ 冷情(名) 冷淡なる心情。つめたき心。
れいじつ 嶺上(名) みねのうへ。
れいじつ 嶺盛山(名) 兜の鉢の、肩の少しく張りたる形のもの。[同じ]。
れいじつ 黎首(名) れいみん(黎民)に同じ。
れいじつ 冷酒(名) 燗をせぬ酒。ひやざけ。[ひとよざけ。]

れいじつ 醴酒(名) あまざけ。こざけ。
れいじつ 麗種(名) 美麗なる種類、又その物。新米代蓋珍器麗種集まらずといふ事なし。[屬]に同じ。
れいじつ 隸從隸從(名) れいぞく隸(隸)に同じ。
れいじつ 靈宗(名) 靈宗(靈宗)に同じ。
れいじつ 冷縮器(名) ぎようしゆくき(凝縮器)に同じ。
れいじつ 靈術(名) 尊く不可思議なる術。靈異なるわざ。
れいじつ 麗春花(名) れいひん(麗)に同じ。
れいじつ 黎庶(名) れいみん(黎民)に同じ。
れいじつ 隸書(名) 隸書(隸書)に同じ。
漢字の書體の一。秦の始皇の時、下柱の人程邈の縣吏たる時、罪を得て、雲陽に囚はれ、獄中大いに工夫し、小篆を更に省略して三千字を作りしに始まる。これと源を同じくして、晉唐の世に隸書と呼びしは、楷書のことにして、後、大いに進化して、今日に楷書となり、別體のもの如くなるに至れり。依つて、分體のものを古隸後を今隸といふ。我國にて、通俗に隸書といふものは、古隸のやや變化して、楷書に近づきたる一種の形にして、八分(八分)とも呼ぶ。

れいじつ 鈴杵(名) 佛[密教の要具なる鈴(鈴)と金剛杵(金剛杵)との併稱。]金剛杵を柄として作りたる鈴。行道(行道)の時に用ふ。
れいじつ 例證(名) 例を引きて、證據とすること。又その證據。[ねの松。]

れいじつ 嶺松(名) 嶺上にある松。み
れいじつ 令色(名) 顔色を令(令)くする義。相手の意を迎へんとして、顔色を繕ひ飾ること。[巧言令色]。
れいじつ 厲色(名) きつとしたる顔つきをなすこと。血相を變ふること。
れいじつ 麗色(名) 氣晴れてうららかなるけしき。[うらはしき顔色。]

れいじつ 冷色(名) 美(美)か(美)寒色(寒)に同じ。
れいじつ 麗種(名) 美麗なる種類、又その物。新米代蓋珍器麗種集まらずといふ事なし。[屬]に同じ。
れいじつ 隸從隸從(名) れいぞく隸(隸)に同じ。
れいじつ 靈宗(名) 靈宗(靈宗)に同じ。
れいじつ 冷縮器(名) ぎようしゆくき(凝縮器)に同じ。
れいじつ 靈術(名) 尊く不可思議なる術。靈異なるわざ。
れいじつ 麗春花(名) れいひん(麗)に同じ。
れいじつ 黎庶(名) れいみん(黎民)に同じ。
れいじつ 隸書(名) 隸書(隸書)に同じ。
漢字の書體の一。秦の始皇の時、下柱の人程邈の縣吏たる時、罪を得て、雲陽に囚はれ、獄中大いに工夫し、小篆を更に省略して三千字を作りしに始まる。これと源を同じくして、晉唐の世に隸書と呼びしは、楷書のことにして、後、大いに進化して、今日に楷書となり、別體のもの如くなるに至れり。依つて、分體のものを古隸後を今隸といふ。我國にて、通俗に隸書といふものは、古隸のやや變化して、楷書に近づきたる一種の形にして、八分(八分)とも呼ぶ。

れいじつ 鈴杵(名) 佛[密教の要具なる鈴(鈴)と金剛杵(金剛杵)との併稱。]金剛杵を柄として作りたる鈴。行道(行道)の時に用ふ。
れいじつ 例證(名) 例を引きて、證據とすること。又その證據。[ねの松。]

れいじつ 嶺松(名) 嶺上にある松。み
れいじつ 令色(名) 顔色を令(令)くする義。相手の意を迎へんとして、顔色を繕ひ飾ること。[巧言令色]。
れいじつ 厲色(名) きつとしたる顔つきをなすこと。血相を變ふること。
れいじつ 麗色(名) 氣晴れてうららかなるけしき。[うらはしき顔色。]

れいじつ 冷色(名) 美(美)か(美)寒色(寒)に同じ。
れいじつ 麗種(名) 美麗なる種類、又その物。新米代蓋珍器麗種集まらずといふ事なし。[屬]に同じ。
れいじつ 隸從隸從(名) れいぞく隸(隸)に同じ。
れいじつ 靈宗(名) 靈宗(靈宗)に同じ。
れいじつ 冷縮器(名) ぎようしゆくき(凝縮器)に同じ。
れいじつ 靈術(名) 尊く不可思議なる術。靈異なるわざ。
れいじつ 麗春花(名) れいひん(麗)に同じ。
れいじつ 黎庶(名) れいみん(黎民)に同じ。
れいじつ 隸書(名) 隸書(隸書)に同じ。
漢字の書體の一。秦の始皇の時、下柱の人程邈の縣吏たる時、罪を得て、雲陽に囚はれ、獄中大いに工夫し、小篆を更に省略して三千字を作りしに始まる。これと源を同じくして、晉唐の世に隸書と呼びしは、楷書のことにして、後、大いに進化して、今日に楷書となり、別體のもの如くなるに至れり。依つて、分體のものを古隸後を今隸といふ。我國にて、通俗に隸書といふものは、古隸のやや變化して、楷書に近づきたる一種の形にして、八分(八分)とも呼ぶ。

れいじつ

れいじつ

れいじつ

れいじつ

あり。その面(一)金容(二)なり。…番番守護の靈石なり。〔らと〕
れいせき 礪石〔名〕質のあらき礪石あり。
れいせつ 禮節〔名〕れいぎ(禮儀)に同じ。正統(一)上下の禮節を亂らす。〔同じ〕
れいせつ 禮接〔名〕れいぐ(禮遇)に同じ。
れいせつ 令節〔名〕かせつ(佳節)に同じ。
れいせん 禮錢〔名〕室町時代に、然るべき祝儀に際して、幕府に奉りし錢。運歩(一)葉集(禮錢)。

れいせん 靈籤〔名〕みくじ(御籤)に同じ。
れいせん 冷泉〔名〕つめたき泉。〔つめたき泉(温泉)に對して〕
れいせん 靈泉〔名〕尊く不可思議なる泉。靈泉ある泉。〔温泉の美稱。〕
れいせん 醴泉〔名〕禮記の禮運篇に「天降甘露、地出醴泉」とあり。あまき泉。古、支那にて、太平の世に湧き出づと稱したり。甘泉。
れいぜん 靈前〔名〕神又は死者の靈を祀れる所の前。みたまの前。
れいぜん 冷然〔貌〕莊子の逍遙遊篇に「列子御風而行、冷然善也」とあり。肌(一)に冷やかに感ずるさま。〔冷淡なるさま。熱情なきさま。ひやか。十訓はかばかしき事もせねば、冷然として出て。〕

れいぜん 靈前祭〔名〕神道にて、死者の靈の前にて行ふ祭儀。れいさい(靈祭)参照。
れいそ 靈詐〔名〕よき福。あらたかなる子息の敬稱。令節。令子(令嬢に對して)。
れいそく 蠶測〔名〕蠶(一)を以て海を測るを見よ。短少なる蠶見を以て、遠大なる事物を測ること。
れいそく 隸屬隸屬〔名〕他に從ひ附くこと。指揮監督の下に立つこと。從屬。隸從。〔てした。部下。隸從。〕
れいそん 令孫〔名〕令はよき義。他人の孫の敬稱。
れいそん 令尊〔名〕令はよき義。れい

げん(令嚴)に同じ。
れいそん 例損〔名〕王朝時代に、田租納付の時、毎年、定例として、損分を免せしこと。二分を免ずるを、不二得八といひ、三分を免ずるを、不三得七といへり。(異損に對して) 〔王朝時代に、調庸に關し、死亡・篤疾・癩疾等によりて、兩者共全免し、老丁(一)に達したるによりて、兩者共半減し、正丁(一)に對して、調のみを半減し、服侍・逃亡を半減とする等、通例の事項によりて、減損せしこと。〕
れいそん 例損戸〔名〕例損田の戸。
れいそん 例損田〔名〕例損田をなしたる田。
れいだ 靈蛇〔名〕尊く不可思議なる蛇。
れいだい 靈體〔名〕曹植の洛神賦に「冀二靈體之復形。御輕舟一而上沂」とあり。耳目には觸れねど、形ありと思はるるもの、即ち神など。〔に同じ〕
れいだい 冷帶〔名〕地かんたい(寒帶)に同じ。
れいだい 冷待〔名〕れいぐ(冷遇)に同じ。
れいだい 禮待〔名〕れいぐ(禮遇)に同じ。
れいだい 靈臺〔名〕莊子の庚桑楚篇に「萬惡至者皆天也、而非、人也。不可、内二於靈臺」とあり。れいふ(靈府)に同じ。〔詩經の大雅靈臺篇に「經二始靈臺」とあり。れいふ(靈府)に同じ。支那の文王のうてな。〔後漢書(一)の註に「靈臺、氣之臺也」とあり。雲氣を望むうてな。天文臺の類。〕
れいだい 例題〔名〕數。英「Problem」。練習のため、例として設くる問題。〔に同じ〕
れいだい 靈代〔名〕たましろ(靈代)に同じ。
れいだい 禮代〔名〕あやし(禮代)に同じ。〔天文博士の唐名。〕
れいだいらう 靈臺(れい)てんもん(唐名)に同じ。
れいだいらう 令堂〔名〕令慈(令慈)に同じ。
れいだいらう 靈堂〔名〕神佛又は貴人の靈を祀れる堂。靈殿。靈舍。
れいたらう 尿道〔名〕道理に戻(一)りてあること。一説、れいたん(冷淡)の音便なりと。〔古語〕「おみづから持(一)てまうて

來(一)ぬしもべは、いとれいだうなりとなん見ゆる。〕
れいたく 靈託〔名〕たくせん(託宣)に同じ。運歩(一)靈託、レイタク。〔易經に「麗澤、君子以二朋友二講習」とあり。學友の相資けて、智徳を磨き修むること。〕
れいたん 冷淡〔名〕白居易の詩に「白花冷淡無三人愛」とあり。花の色などの、淡(一)く熱しなざること。〔深く心にためぬこと。不親切。〕
れいたん 黎旦〔名〕れいめい(黎明)に同じ。
れいたん 荔丹〔名〕荔枝の赤き實。
れいたん 冷暖〔名〕ひやかかなることと、あたかなること。寒暖。
れいち 靈地〔名〕靈異なる地。神社・佛開等のある地。靈區。靈境。靈域。靈場。俗つれれ「泰くも不動明王の靈地にて、飲酒戒(一)を保つ所」。〔に同じ〕
れいち 靈池〔名〕靈驗ある池。神靈の宿れる池。太平(一)風雨時に吐ひ、感應奇特の靈池なり。〔に同じ〕
れいち 禮智〔名〕禮と智と。禮儀と智慧。
れいち 靈智〔名〕靈妙なる智慧。
れいち 令長〔名〕事を主宰する人。十訓(一)孔子、大廟に入りて、まつり事に従ふ時、事ごと、彼の令長に問はずといふ事なし。〔連文釋義に「漢法、縣萬戸以上爲令、以下爲長」とあり。支那漢代の縣の長官。〕
れいち 靈長〔名〕郭璞の江賦に「水徳之靈長」とあり。靈妙なるかしら。
れいち 醴腸〔名〕植(一)たかさぶらう(高三郎)の漢名。
れいち 冷腸〔名〕冷淡なる心。同情心の無きこと。不親切。
れいち 靈場〔名〕李嶠の詩に「廻旌駐蹕降靈場」とあり。れいし(靈時)に同じ。〔れいち(靈地)に同じ。盛衰記(一)靈寺・靈場の、多く亡び失せたまふは〕
れいち 令嬢令娘〔名〕他人の娘の敬稱。令愛。(令息に對して)

れい(一)の杖に同じ。〔髮(一)の前髪。〕
れいちやう まへがみ 令嬢前髪〔名〕鹿類の一目。大脳の發達程度極めて高く、顔部短く、胸部の一對の乳房あり、手足、殊に手は、よく物を握るに適す。人類(一)手類及び猿類(四手類)を含み、廣鼻類、狹鼻類、人類の三亞目に分つ。人類は身體の構造上よりすれば、猿類と極めて近きが故に、相合して、この目を立つ。
れいてい 令弟〔名〕令はよき義。他人の弟の敬稱(令兄に對して)。
れいてい 玲玕〔名〕玉石の音。玲玕。玲々。志を失ふさま。〔鳥。靈禽。〕
れいてう 靈鳥〔名〕尊く不可思議なる鳥。
れいてう 藜藿〔名〕植(一)あか(藜)の漢名。即、藜藿(一)草、滋(一)潤洲之巷、藜藿深鎖、兩澤(一)原藜之極。〔に同じ〕
れいてう 冷嘲〔名〕冷淡にあざけること。ひやかすこと。冷笑。〔冷嘲(熱罵)に同じ。〕
れいてがみ 禮手紙〔名〕れいじやう(禮狀)に同じ。
れいてき 靈笛〔名〕靈妙なる音の發する笛。又その音。盛衰記(一)紅葉に相交はり、空より靈笛の雨(一)りしを。〔に同じ〕
れいてふ 零疊〔名〕脱落と重複と。類聚(一)諸國班田(一)零疊者多。〔典例。〕
れいてん 禮典〔名〕しきたりのきだめ。〔三禮典、以和三邦國、以統二百官、以諧萬民ことあり。〕禮式(一)のきだめ。禮に關する制度。禮法。典禮。〔禮を具へたる儀式。講曲(一)社祿を贈り、禮典ひまなく崇めたまふ。〕
れいてん 禮袋〔名〕神佛又は死者の靈に、禮法を具へて、物を供ふること、又その供物。太平(一)幣帛を捧げ、禮袋を調へ、祈誓を致し候はんずる最中。〔に同じ〕
れいてん 零點〔名〕試験にて、少しも得點なきこと。〔攝氏及び列氏の寒暖

れい(一)の杖に同じ。〔髮(一)の前髪。〕
れいちやう まへがみ 令嬢前髪〔名〕鹿類の一目。大脳の發達程度極めて高く、顔部短く、胸部の一對の乳房あり、手足、殊に手は、よく物を握るに適す。人類(一)手類及び猿類(四手類)を含み、廣鼻類、狹鼻類、人類の三亞目に分つ。人類は身體の構造上よりすれば、猿類と極めて近きが故に、相合して、この目を立つ。
れいてい 令弟〔名〕令はよき義。他人の弟の敬稱(令兄に對して)。
れいてい 玲玕〔名〕玉石の音。玲玕。玲々。志を失ふさま。〔鳥。靈禽。〕
れいてう 靈鳥〔名〕尊く不可思議なる鳥。
れいてう 藜藿〔名〕植(一)あか(藜)の漢名。即、藜藿(一)草、滋(一)潤洲之巷、藜藿深鎖、兩澤(一)原藜之極。〔に同じ〕
れいてう 冷嘲〔名〕冷淡にあざけること。ひやかすこと。冷笑。〔冷嘲(熱罵)に同じ。〕
れいてがみ 禮手紙〔名〕れいじやう(禮狀)に同じ。
れいてき 靈笛〔名〕靈妙なる音の發する笛。又その音。盛衰記(一)紅葉に相交はり、空より靈笛の雨(一)りしを。〔に同じ〕
れいてふ 零疊〔名〕脱落と重複と。類聚(一)諸國班田(一)零疊者多。〔典例。〕
れいてん 禮典〔名〕しきたりのきだめ。〔三禮典、以和三邦國、以統二百官、以諧萬民ことあり。〕禮式(一)のきだめ。禮に關する制度。禮法。典禮。〔禮を具へたる儀式。講曲(一)社祿を贈り、禮典ひまなく崇めたまふ。〕
れいてん 禮袋〔名〕神佛又は死者の靈に、禮法を具へて、物を供ふること、又その供物。太平(一)幣帛を捧げ、禮袋を調へ、祈誓を致し候はんずる最中。〔に同じ〕
れいてん 零點〔名〕試験にて、少しも得點なきこと。〔攝氏及び列氏の寒暖

れい(一)の杖に同じ。〔髮(一)の前髪。〕
れいちやう まへがみ 令嬢前髪〔名〕鹿類の一目。大脳の發達程度極めて高く、顔部短く、胸部の一對の乳房あり、手足、殊に手は、よく物を握るに適す。人類(一)手類及び猿類(四手類)を含み、廣鼻類、狹鼻類、人類の三亞目に分つ。人類は身體の構造上よりすれば、猿類と極めて近きが故に、相合して、この目を立つ。
れいてい 令弟〔名〕令はよき義。他人の弟の敬稱(令兄に對して)。
れいてい 玲玕〔名〕玉石の音。玲玕。玲々。志を失ふさま。〔鳥。靈禽。〕
れいてう 靈鳥〔名〕尊く不可思議なる鳥。
れいてう 藜藿〔名〕植(一)あか(藜)の漢名。即、藜藿(一)草、滋(一)潤洲之巷、藜藿深鎖、兩澤(一)原藜之極。〔に同じ〕
れいてう 冷嘲〔名〕冷淡にあざけること。ひやかすこと。冷笑。〔冷嘲(熱罵)に同じ。〕
れいてがみ 禮手紙〔名〕れいじやう(禮狀)に同じ。
れいてき 靈笛〔名〕靈妙なる音の發する笛。又その音。盛衰記(一)紅葉に相交はり、空より靈笛の雨(一)りしを。〔に同じ〕
れいてふ 零疊〔名〕脱落と重複と。類聚(一)諸國班田(一)零疊者多。〔典例。〕
れいてん 禮典〔名〕しきたりのきだめ。〔三禮典、以和三邦國、以統二百官、以諧萬民ことあり。〕禮式(一)のきだめ。禮に關する制度。禮法。典禮。〔禮を具へたる儀式。講曲(一)社祿を贈り、禮典ひまなく崇めたまふ。〕
れいてん 禮袋〔名〕神佛又は死者の靈に、禮法を具へて、物を供ふること、又その供物。太平(一)幣帛を捧げ、禮袋を調へ、祈誓を致し候はんずる最中。〔に同じ〕
れいてん 零點〔名〕試験にて、少しも得點なきこと。〔攝氏及び列氏の寒暖

れいそん

れいそん

れいち

れいち

れいぞう

れいぞう 太政官の雅樂局に置かれ、一旦廢止の後、又、式部寮に置かれし職員。雅樂局にては、俗生の下に立ち、式部寮にては、等外吏として、雅樂の事に服務する職となり、後、一等より四等までに分たれしが、明治十七年、式部寮の廢止と共に廢せられたり。

れいぞう 令尹 [名] 支那周の楚國の上の嶺猿 [名] 嶺に棲める猿。れいぞう 靈屋 [名] 祖先の靈を祀れる家。おたま。靈廟。

れいぞう 寮 [名] 王朝時代に、司と共に、省の被官たりし官署の稱呼。例へば、中務(中務)省の左右大舍人(中務)寮、圖書寮(圖書)寮、縫殿寮(縫殿)寮、式部省の大學生寮、散位寮など。訓讀して「つかさ」ともいひ、四部官は、頭(頭)・助(助)・允(允)・屬(屬)と書けり。學校・寺院などに、學生等の寄宿する所。學寮。寄宿舎。ちやれう(茶寮)の略。回ひかへていしもやしき。別荘。娼妓舞廳(舞廳)の寮とて、人も知り、あたりに目立ちし一構は、新町(新町)の女郎屋榎屋治衛門が別業なり。

れいぞう 寮の馬 [句] 古、左右馬寮(左右)に飼養せし馬。平雲寮の御馬(御馬)に、(四手)附けて、數十匹引き立てらる。

れいぞう 料 [名] 用ふべき物。役に立つる品。しほ。材料。源兵衛(源兵衛)の料、せま(せま)とて、そのれうの物、文(文)など書き添へて持(持)て來たり。字遣、その料の紙は、いまだあるらん。ため。源兵衛(源兵衛)の初の日は先帝の御れう、次の日は母后の御ため。れいぞう(料金)の略。

れいぞう 綾 [名] 綾の字の音、正しくはりよ(綾)あや(綾)に同じ。古語、然れうの表袴(表袴)……など、いみじう鮮かにて「れう」遠(遠) [名] 支那の北方の王朝の一。人種上、契丹(契丹)種族に屬し、姓は耶律氏。初、契丹(契丹)と稱し、熱河に居りしが、後、梁の時、阿保機(阿保機)帝を稱するに及びて、國號を遼と名づく。境域、東は日本海、西は天山に及び、内、外蒙古を包み、直隸、山西の北境に達せしが、九帝、二百

十年(我國の紀元一五七六年—一七八五年)にして、金に滅ぼさる。滅後一族なる耶律大石は、西に走り、中央亞細亞に四遼國を建て、四世、八十八年(紀元一七八四年—一八七一年)に及べり。

れいぞう 僚友 [名] あひやく。同僚。同僚。僚輩。

れいぞう 寮歌 [名] 學校に校歌あると同様に、學寮、又、寄宿舎のために作りて、寮生、寄宿生のうたふ歌。

れいぞう 寮暇 [名] 佛(佛)禪宗にて、眼を請ひて、寮内に休止すること。塵訓(塵訓)註來「請暇(病眼寮暇暫暇僧來)」

れいぞう 遼海 [名] 廣廣とはるかなる海。慶長(慶長)夜の雁の遼海に啼くを。

れいぞう 了海 [名] 鎌の形の一種。れいぞう 了解 [名] さとること。合點。會得。理會。領解。了得。了覺。了悟。れいぞう 了覺 [名] 前條に同じ。れいぞう 了覺 [名] 仲間の軍艦。同じ任務に就きある軍艦。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。れいぞう 了義 [名] 佛(佛)究竟(究竟)の實義を、明らかに顯はすこと。

る屋舎。太平記、佛殿、法堂、庫裏(の)……七十餘宇の寮舎、八十四間の廊下」

れうじゆら 寮掌(名)「寮」の雑仕。官掌(の)の類。三代實録「内匠寮の造兵寮掌一員」

れうじゆ 寮主(名)「佛」禪寺にて、寮元の下にありて、寮内の衆僧の衣物を守護する役。知寮。

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうじゆせう 寮首座(名)「佛」れうげん(寮元)と同じ

れうち 瞭知(名)「明瞭」に知ること。れうち 了智(名)「佛」分別の智慧。暹羅天蓋恐怖を生ぜず、了智を添へず、一氣に進んで退かざるときんば

れうち 療治(名)病を癒すこと。治療(の)の。榮花すばくにおはしますとて、その方のれうちども「廣訓往來爲治療灸治」

れうちじゆき 了知主義(名)「法」契約の成立時期を定むるに、申込者が、相手方の返事を受け、これを了知したる時をそれと定むる主義。(發信主義・受信主義・表白主義に對して)

れうちやう 寮長(名)「寮」の長。佛「れうげん寮元」を見よ。目しやちやう(舎長)の舊稱。(明治二年、大學校に置かれ、大・中・少の三等ありて、學寮の生徒の監督を掌りし判任官。大學校の大學と改稱せらるるに及びて、又、その職員となり三年三月舎長と改稱せらるる)

れうちやう 寮養(名)療治と養生と。保養。れうちやう 遼陽(名)「地」支那滿洲奉天省奉天府の所轄に屬する州。奉天府の南三十七里弱に位し、南滿洲鐵道に沿ふ。漢魏、晉の遼東郡の地にして、唐代には安東都護府設けられ、遼、金の都となり、州城の東北には、清の太祖の、奉天に移るまで、一時都せし京城あり。又、日清、日露の兩役に於ける戰場にして、北方には、我國の經營に屬する烟臺、炭坑あり。

れうち

れうち

れうち

れうち

〔語〕次條に同じ。(比較的文典に對して) 〔語〕れきしつぶんばふ 歴史的文法〔名〕 〔語〕れきしつぶんばふ 歴史的文法に同じ。(比較的文法に對して)

れきしつぶんばふ 歴史哲學〔名〕『英Philosophy of History』一種の哲學思想を基礎として、歴史の大勢を觀察せんとするもの。獨逸のヘルメル(Hermer)、シュレゲル(Schlegel)、ヘゲル(Hegel)、佛蘭西のゴット(Gotte)、英吉利西のスペンサー(Spencer)等、この學の翹楚たり。

れきしつぶんばふは 歴史法學派〔名〕〔法〕『英Historical school of Law』法制は製作物に非ずして、歴史的に發達し來れるものなるが故に、法制の現象を法理學研究的の對象とし、種種なる法制的現象を歴史的に研究して、法の最上原理を定めんとする學派。(比較法學派に對して)

れきしつぶんばふ 歴史美〔名〕『英Historian beauty』歴史的事實によりて誘起せらるる美感。

れきしつぶんばふ 歴史風景畫〔名〕『英Historic Landscape painting』自然をその儘寫したるに非ずして、美術家自身の趣味に従ひ、昔物語又は歴史の句を取り入れて組み立てたる風景畫。

れきしつぶんばふ 歴史文典〔名〕〔語〕次條に同じ。(比較文典に對して)

れきしつぶんばふ 歴史物語〔名〕歴史を基として成れる物語、即ち大鏡、榮華物語などを、落窪物語、源氏物語等の假作物語と區別して、ふ語(軍記物語)、歴史に關すれども、通例この内に包含せしめず。れきしつぶんばふ 歴史小説〔名〕『莊子の人間世篇に「匠石之齊、至乎曲轅、見一斲社樹」とあり』支那にて「斲」を植えて、社(の)のしるしとせるもの。椽を神として、その下に、かりそめの祠を設け、或は、鳥居のみ立てなどせるもの。太平記山

家村里の神社、社道祖の小神までも) 〔書〕れきしつぶんばふ 曆象〔名〕『書經の堯典篇に「曆象日月星辰」とあり』曆によりて、日月星辰の運行を推算すること、又その運行、天文。

れきしつぶんばふ 曆樹 樸樹〔名〕〔植〕くぬぎ 〔書〕れきしつぶんばふ 曆術〔名〕日月星辰の運行を測りて曆を作る術。

れきしつぶんばふ 曆巡〔名〕順次にめぐりあはるること。巡歴。歴遊。遊歴。巡遊。 〔書〕れきしつぶんばふ 曆書〔名〕曆(の)に關する書。 〔書〕れきしつぶんばふ 曆數〔名〕『書經の洪範篇に「五日曆數」とあり』曆運の數の義。定數ありて、運行盈虧するより、數といふ。日月星辰の運行、盈虧、曆の中の四時、氣節。 〔書〕論語の堯曰篇に「堯曰、咨爾舜、天之曆數、在爾躬」とあり。曆の中の四時、氣節に先後の次第あるが如くなる。正統記「堯不(合)の算、八十三萬餘年ましまししに、その御弟摯象(の)の算の御世より、俄かに人皇の代となりて、曆數も短くなりける事、疑ふ人もあるべきにや」 〔書〕天皇に代りて、天下の政治を執る者の、代代相繼ぐこと。太平記平氏、執を執つて九代、曆數、已に百六十餘年。 〔書〕れきしつぶんばふ 曆世〔名〕れきたい(歴代)に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 曆生〔名〕古、陰陽(の)察に屬して、曆術を學びし學生。 〔書〕れきしつぶんばふ 曆正〔名〕れきたい(曆官)に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 瀝青〔名〕〔化〕『英Bitumen』有機性なる一種の物質。即ち「ちやん」など。

れきしつぶんばふ 瀝青石〔名〕〔英〕『英Phtis stone』暗綠色、黑色又は赤色を呈し、脂光を帯びたる玻璃質火山岩。 〔書〕れきしつぶんばふ 瀝青炭〔名〕〔鐵〕『英』(iron coal) 焦炭の一種。油質に富み、漆黑色を呈し、炭素の分量は無煙炭よりは少きもの。長き炭を發して燃焼す。 〔書〕れきしつぶんばふ ちよさうかう 歴世女裝考〔名〕『書』わが國古今の女子の頭髮、服

裝等に關する事項を、數十條に分ちて考證説明せるもの。四卷。山東京山の著。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴節風〔名〕つうふう(通風)に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴然(貌) 明らかに見わけの附くさま。ありあり。太平記因果歴然) 〔書〕れきしつぶんばふ 歴代 歴世。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴代皇紀〔名〕〔書〕神武天皇より後土御門天皇の文明九年までの事を、編年體に記せるもの。卷首に、神代十二代の事蹟の大體を記し、本文は五紙を五段に對して、帝號、宮號、年號及び事件の重要なものを記せり。裏書一卷あり、合はせて六卷。洞院公賢の著。續群書類從に收む。一名、皇代曆皇代略記。歴代撮要。

れきしつぶんばふ 歴代滑稽傳〔名〕〔書〕荒木田守武・山崎宗鑑より松尾芭蕉に至る俳人の略傳と句讀を記し、卷尾に、一枚起請及び俳諧指辨の二文を載せたるもの。一卷。藤川許六の著。卷尾の二文は、許六の俳諧に對する抱負を知り得る究竟の材料なり。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴代撮要〔名〕〔書〕れきたい(わかしよ) 歴代皇紀に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴代和歌勅撰考〔名〕〔書〕萬葉集及び古今集以下の歴代の勅撰集につきて考證せるもの。六卷。吉田令世(の)の著。存探叢書に收む。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴道〔名〕〔書〕曆術に關する學問、又それに関連せる人。中右記今日可問三日餽之由、曆道奏聞。 〔書〕古の陰陽(の)察の學科目の一。曆法を教へしめたり。別に、漏刻の學科をも附屬せしめたり。後世、賀茂氏の世襲となれり。 〔書〕れきしつぶんばふ 樸樗〔名〕〔書〕司馬光の詩に「自槐樸樗非遠器」とあり。ちよれき(樗樗)に同じ。 〔書〕歴代。皇朝。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴朝〔名〕歴代。皇朝。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴朝詩集〔名〕〔書〕大同、弘仁の頃より、徳川時代までの日本人

の詩を集めたるもの。前後兩編に分れ、前編は二十卷にて、保元平治の頃までの諸家二百四十四人の作を掲げ、後編は七百六十九人の作を掲げて、八十卷とする豫定なりしが如くなれども、出版せられしは二百二十二人の詩、十三卷・七冊のみ。常陸國守山(の)藩主松平頼寛の編。江村北海の日本詩史に、編撰當を得ざる所あるを指摘せり。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴朝詔詞解〔名〕〔書〕續日本紀中の宣命六十二篇を抄出して、訓讀、解釋を施し、なほ、初に、宣命の意義、筆者、講儀式等につきての概説を敘したるもの。六卷。本居宣長の著。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴傳〔名〕次次に傳ふること、又、次次に傳はること。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴石〔名〕石礫を多く含有せるれきたい(歴石)に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴年〔名〕としつき。歳月。 〔書〕曆に定めたる一年、即ち陽曆の一年は三百六十五日(閏年は三百六十六日)なるが如き、これなり。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴年〔名〕年を歴ること。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴馬〔名〕〔書〕樞間に伏してある馬。 〔書〕俗果に妨げられて、志を伸ばしがたき人の譬。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴拜〔名〕じゆんばい(巡拜)に同じ。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴訪〔名〕順次に訪問すること。 〔書〕歴問。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴博士〔名〕古、陰陽(の)察に屬して、曆を作り、兼ねて、曆生に曆道を教ふることを掌りし官。定員一人。後、権(の)曆博士一人を置く。曆日博士。りやくはかせ。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴法〔名〕曆日に關する法則。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴尾〔名〕『曆の末尾の義』年のくれ。年末。歳除。殘曆。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴本〔名〕れきたい(曆書)に同じ。 〔書〕皇卜書。 〔書〕れきしつぶんばふ 歴命〔名〕曆數と天命と。

ずとの説あれども、後世、唐の玄宗帝は、尊
びて、冲虚真人と稱し、宋の眞宗帝は、更に
二字を加へて、至徳冲虚真人といへり。
れつぎよはぶ 列學法【名】「法」れつきほ
（列記法）に同じ。「ふ語」

れつぎれつぎ【名】れつきを重ねて強めてい
れつぐわ 烈火【名】烈しき勢の火。猛火。
烈火の如し【句】顔を眞赤（まこと）にして
怒る譬。

れつぐわ 裂果【名】「植」【英】Dahlgren
fruit【熟する時】裂開する果實。例へば
朝顔・油菜・薔（ばら）の果實など。（閉果に
對して）

れつぐわい 列外【名】隊列の外部。（列
れつぐわい 列外下士【名】「兵」觀
兵式の時、聯隊本部、大隊本部に附屬せる
下士。

れつぐわいせうたい 列外小隊【名】「兵」
觀兵式にて、これに參列すべき諸隊の列
外下士諸工長計手、看護長等を集めて組
み合はせたる小部隊。

れつぐわう 列皇【名】代代の天皇。列
れつぐわん 列官【名】居並びたるつかさ
びと。もろもろの役人。

れつぐけん 列見【名】古、太政官の朝所（
ちやうじやう）にて、二月十一日に、上卿（じやうけい）・辨
少納言・外記（げい）・史（し）など參りて、行は
れし公事。六位以下の文武官の中、藝能
ある者を選びて、式部・兵部の二省より率
ゐて參れるを、上卿召し寄せて、その器
量容儀を見しこと。れけん。ざん（
擬階奏參照）

れつぐ 劣弧【名】「數」【英】Minor arc【共
軌弧の、小なる弧。劣共軌弧。優弧に對
して）

れつぐり 列侯【名】しよこ（諸侯）に同
れつぐり 烈公【名】「人」なぐははなりあき
（徳川齊昭）の諡。

れつぐり 列國【名】もろもろの國。多く
れつぐり 列國會議【名】列國の
使臣が寄り合ひて催す、國際事件の會議。
れつぐり 列國公法【名】「法」
（Vattel）の國際公法に同じ。

れつぎ 列座列坐【名】「列座は、座を列
ぬる義、列坐は、列なり坐る義」並びてす
ゐること。列席。連坐。

れつぎ 劣才【名】「才」おとりたる才能。駕
れつぎ 劣才【名】「才」おとりたる才能。駕
れつぎ 劣才【名】「才」おとりたる才能。駕
れつぎ 劣才【名】「才」おとりたる才能。駕

が完全なりや否やを確認せしめ、且つ單
線の線路に於て、反對列車に警告を興へ
て、衝突を未然に防止する目的を以て、列
車の前部及び後部に掲示する信號。
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、
れつぎ ぼおひ 列車ボオイ【名】「運轉
せる列車に乗り組み、乗客のために、便
宜を興ふる少年。」「宿、多くの星座、

「日本列島」琉球列島【名】「べおくこと。
れつち 列置【名】「つらねおくこと。なら
れつち 列置【名】「つらねおくこと。なら
れつち 列置【名】「つらねおくこと。なら
れつち 列置【名】「つらねおくこと。なら

おえうい

通常、兩線の間に、この連結法を取る。(行並(び)に對して)

れっぱい 列拜・列拜【名】ならびて拜すれっぱい 劣敗【名】劣れるものが、競争に負けること。「優勝劣敗」

れっぱく 裂帛【名】帛(び)を引き裂くこと。「白居易の琵琶行に「曲終收撥當心畫、四絃一聲如裂帛」とあり」清(きよ)く厲(り)しき聲音の聲。

れっぱん 列藩【名】つらなり立てる各藩。諸大藩。【名】「英英 Ratio of Lesser Inequality」前項が後項より小なる比。(優比に對して)

れっぴん 列品【名】ならべたる品。陳列れっぴん 烈夫【名】れん(烈士)に同じ。

れつぷ 烈婦【名】れつちよ(烈女)に同じ。れつぷり 烈風【名】はげしく吹く風。

れつりつ 列立【名】(風力階)を見よ。【名】「地」よりよ(か)く(風力階)を見よ。【名】「地」よりよ(か)く(風力階)を見よ。



度計【英】Reognant's hygrometer【名】「理」湿度を測るために、露點を見出たず装置ある湿度計。二本の太き硝子管の、底部を、各、薄き銀の筒筒にて造りたるを、臺に並べて取り附け、雙方共に寒暖計を挿し入れその三方にはエテルを入れ、適當の方法により、空氣の泡を中に送り、エテルを蒸發せしむる時は、底部なる銀筒の表面に曇を生ずるにより、中の寒暖計を見れば、露點を知るを得。他の一方の管は、曇の程度を比較するため備へ、佛蘭西の理化學者レニヨオの創案に係る。

れん 獵【名】山野に鳥獸を狩ること。狩獵。【名】すなわち、獵。【名】すなわち、獵。

ぬ我こそあふ事をともしの松の燃えこがれぬれ【名】(漁)を業とする人。漁夫。漁人。【名】「山を見ず」を見よ。【名】「山を見ず」を見よ。

れん 獵【名】山野に鳥獸を狩ること。狩獵。【名】すなわち、獵。【名】すなわち、獵。

れんが

各樂器の奏部を別別に記す場合等に用ふ。以上の中、後の二者の場合には、各譜表の数は多数に上るべく、その場合は、特に總譜表と呼ぶことあり。大譜表。

れんがふりつ 聯合律「名」哲「れんさうりつ」聯想律に同じ。

れんき 連記聯記「名」れき「列記」に同じ。れんき 鍊氣「名」五代史の豆腐革傳に「服丹鍊氣以求長生」とあり「れんき」煉丹「名」に同じ。

れんき 連木「名」すりこぎ「搗粉木」を云ふ。「畿内・西國中國四國の方言」。

れんき 連木が鳥になる「句」山芋「ヤモ」が鰻になる「句」に同じ。「諺語」。

れんき 連木が羽根生えて飛ぶ「句」搗粉木「名」に同じ。「諺語」。

れんき 連木で腹を切る「句」搗粉木「名」で腹を切る「句」に同じ。「諺語」。

れんき 連木で門「砂掃く」句「植て庭を掃く」に同じ。「諺語」。

れんき 連木の峯打「句」刀の切味「鈍きを」に同じ。「諺語」。

れんき 廉義「名」廉直にして正義なること。「ただ藤原賴忠の説」。

れんき 廉義公「名」人「ふぢほらより」。

れんき 廉義公「名」連記商數法に依る投票票「名」。

れんき 廉義公「名」連記商數法「名」。

れんき

れんきん 鍊金「名」鍊りきたへたる黄金。「部分を、二人にて鍊ふこと」。

れんきん 連吟「名」諸曲にて、文句の或れんきん「しゆつ」鍊金術「名」英「Alchemy」。

れんきん 鍊金術「名」英「Alchemy」。

れんき

れんきん 鍊軍「名」支那清朝の末年に、從來の八旗綠營等の兵種以外に、それらの中より精選して、新たな方法制度の下に訓練せし、精銳なる兵。遂に同朝の軍隊の主力たるに至れる。

れんきん 蓮花「名」蓮の花。れんげ。

れんき

れんきん 蓮花「名」蓮の花。れんげ。

あはくさ。ほぼづき。

れんげいえ 蓮華衣 [名]「佛」けき(袈裟)の異稱。大闍梨(惠瓊)を目がけ、うち掛け給ふ以前の蓮華衣。「を」見よ。

れんげくわうおん 蓮華光院 [名] 次條

れんげくわうおんもんせき 蓮華光院門跡 [名] 眞言宗に屬する舊攝家門跡の一。大僧正道尊(以仁)王の子を祖とし、第九代寛法大僧正の後、中絶し、寛文十三年、大僧正性演再興して近世に至りしが、明治維新後廢せらる。初、山城國葛野(今)郡安井村(今は太秦)の村(大宇)にありしより、安井門跡ともいひ、元祿中、洛東觀勝寺に併せ、大覺寺の兼帯に屬するたり。やすらじや(安井神社)參照。

れんげけ 蓮華傷 [名]「佛」法華經は具きには、妙法蓮華經といふによりていふ法華經中の傷(ワ)蓮傷(れん)十訓同。心契變蓮華傷。匪石詞入三鏡字門。

れんげいこく 蓮華國 [名]「佛」(蓮華)のちぞ(極樂淨土)に同じ。「(佛)坐)に同じ。

れんげき 蓮華坐 [名]「佛」開きたる蓮華に象りたる、佛像の臺座。蓮華藏(れんげき)世界の義に取るといふ。蓮華寶座。蓮座。蓮臺。はちすのうてな。

れんげさう 蓮華草 [名]「植」(蓮)科に屬する多年生の草。高さ約一尺、葉は、大抵二十一枚の小葉より成る奇數羽狀複葉にして、各小葉は、全縁の卵形、微凹頭をなし、花は、四五月の頃、長き花莖の頂に、概ね七筒づつ相集まり、頭狀花序をなす。開き、旗瓣は紅紫色、翼瓣はやや淡く、龍骨瓣の上部は最も濃し。又、往往白花のものあり、實は莢をなす。秋、田野に下種し、翌春萌えて成りて成長したる、肥料とす。げんげ【紫雲英】精佛師奇人顯心「手に取るなや(風露草)に同じ。



(四)うさげんれ

れんげえ

れんげさう 蓮華藏 [名]「佛」次條の略。

れんげさうせかい 蓮華藏世界 [名]「佛」法身佛の淨土。最下に風輪あり、その上に香水海ありて、大蓮華生じ、この蓮華の中に、微妙數の世界を包藏せりと説く。華藏(れんげ)世界。華藏界。華藏。蓮藏。華王(れんげ)世界。れんげ蓮華座參照。

れんげさん 蓮華山 [名]「地」越後越中、信濃の三國に跨れる高山。大小の二峯ありて、大蓮華は高さ九八六六尺。越中の立山(やま)と連續せる火山脈に當る。

れんげじようま 蓮華升麻 [名]「植」毛茛(れんげ)科に屬する多年生の草。高さ二尺餘、葉は三出重複葉にて、小葉には鋸齒あり。花は、萼片凡そ十筒、淡紫色を帯びて、白く、花弁も十餘筒あり、花梗長し。我國、本州の諸高山に自生し、又觀賞用に供す。くさねんげ【華座)に同じ。

れんげだいに 蓮華臺 [名]「佛」れんげき蓮

れんげだに 蓮華谷 [名]「地」紀伊國高野(やま)山にある谷の一。平雲(やま)野(やま)山にあり、谷の入り、奥の院に納めつゝ、蓮華(れんげ)谷(やま)に成り、「こと

れんげつ 蓮結 [名]「むすびつけ」續く

れんげつ 廉潔 [名]「せいれん(清廉)に同じ。

れんげつ 連月 [名]「つきづき」毎月。果

れんげつ 連月 [名]「人」女歌人。名は誠

れんげつ 蓮月 [名]「人」女歌人。名は誠

れんげつ 蓮華女 [名]「佛」人に受戒を勸むる女子の美稱。「んげばな

れんげつ 蓮華花 [名]「佛」胎藏界の三部の一、又、剛界の五部の一。胎藏界のは、佛の慈悲を代表する部門にして、觀音(くわん)虚空藏(くわく)等の諸菩薩(ぼさつ)の佛心に屬し、金剛(きんごう)界のは、衆生(しゆじやう)固有の佛心、六道生死(りく)の中にありて、汚染せざるを、泥中の蓮に譬へたるもの。

れんげつ 蓮華峰寺 [名] 次條を見よ。

れんげつ 蓮華寶座 [名]「佛」れんげき蓮華座の尊稱。「合樹)に同じ。

れんげつ 蓮華木 [名]「植」ゆりのき(百

れんげつ 蓮華王 [名]「佛」釋迦佛、前生(ぜんじやう)に、端正殊妙、神威顯赫たる太子となり、一日出遊の途上、身骨病弱の者に遭ひ、その望に任せて、自ら身骨を破り、髓を與へて、これを癒えしめ、毫も悔恨せざりし由、彌勒所問本願經に記せるもの。釋迦佛、前生に、波羅奈(ばらな)國の王のために、天下よく治まりしが、人民食のたために、種種の病生じ、諸醫、赤魚の肉を食せしめば、病癒ゆべしと進言するや、自ら赤魚の形に化して、河中に生じ、人民の、斧斤を以てその肉を割取するに任せ、割取せられたる處は、直ちに復た肉を生じ、十二年間、民衆に給施して、毫も悔恨せず、遂に命終りて、切別(せつべつ)天に生れし由、百緣經の卷四に記せるもの。

れんげつ 蓮華往生 [名]「佛」死後、極樂淨土の蓮華座の上(じやう)に生るること。野守の鏡蓮華往生したりければ、日蓮宗不受不施の餘黨が、寛政の頃、大なる蓮華座を設けて、愚癡なる信徒をその上に登らしめ、衆僧諷經の間に、下より槍を突き入れて刺殺したりといふこと。出雲英靈(いづも)かの不受不施の輩、上總國に於て黨を集め、蓮華往生といふ事をして

れんげつ 蓮華王院 [名]「さんじふさんげんたう)三十三間堂)に同じ。著聞

れんげつ 蓮華會 [名] 大和國の當麻(たうま)寺にて、七月二十二日に修する法會。中將姫(なかつ)の寺にて、天平寶字七年六月二十二日、藕絲(くわ)の曼陀羅(まんだら)を感得せし記念なりとて、従前は同月に行ひ、近來七月に變更せり。「と、しきりに呼び立つること。

れんげつ 蓮呼 [名] 連續して呼ばはるること。蓮湖 [名]「地」山城國巨保池(きよ)の異稱。

れんげつ 蓮語 [名] 二つ以上の語の連なりて、一語となれるもの。熟語。

れんげつ 蓮基聯基 [名] 偶數の人数が二組に分れて、一局の碁を、一石づつ打つこと。味方同士と雖も、助言協議を許さざるものとす。

れんげつ

れんたいくちやうへいじんかん 聯隊區
徵兵醫官(名) 毎年徵兵事務執行の際、陸軍一等軍醫一名、これに充てられ、聯隊區司令官に屬して、その區内徵兵の身體検査に係る事を管掌するもの。その下に、副醫官あり。

れんたいくちやうへいじんかん 聯隊區徵兵官(名) 徵兵官の一。聯隊區司令官及び島司、郡市長(北海道の區にては區長、東京市、京都市、大阪市にては、検査區毎に聯隊區司令官及び區長)、これに充てられ、聯隊區司令官首座となり、その區内の徵兵事務を執行するもの。

れんたいくちやうへいじんかん 聯隊區徵兵參事員(名) 明治三十七年三月以前、聯隊區内の徵募區及び検査區に置きし職。郡市の名譽職參事會員、これに充てられ、徵募に應ずる時は、その家族自活する能はざる時、その徵集延期及び徵集免除に關する事件を審議し、意見を徵兵官に具申することを掌りし者。

れんたいくちやうへいじんかん 聯隊區徵兵署(名) 聯隊區内の徵募區及び検査區に設けられ、その區内の徵募事務を取り扱ふ所。
れんたいくちやうへいじんかん 聯隊區聯合徵兵署(名) 東京市、京都市、大阪市聯合徵兵署(名) 東京市、京都市、大阪市の徵募區毎に、聯隊區司令官、市長及び各區長、これに充てられ、聯隊區司令官、首座となり、その區内の抽籤事務を執行するもの。

れんたいけい 連體形(名) 動詞形容詞及び助動詞の、體言の上に連なる時の形、即ちその語尾變化の第四段の形。
れんたいけん 連體言(名) 語、動詞形容詞及び助動詞の、連體形なるもの。

れんたいさいむ 連帶債務(名) 法二以上連帶して負ふ債務、即ち各債務者が、債権者の請求に従ひ、その債務の全部又は一部を履行する義務ありとなす債務。

れんたいじ 蓮臺寺(名) 地 京都市上京區千本通(新橋)鞍馬口上の鷹野十二坊町にある新義真言宗の寺。具には上品(新)蓮臺寺といひ、蓮華金山・地藏院と號す。本尊は地藏菩薩。古は、香隆寺ともいへり。平安朝中期以後、その東北の地域、火葬場となり、蓮臺野と呼べり。
れんたいじ 蓮臺寺(名) 地 伊豆國賀茂郡稻生澤(新)村の大字。下田(新)町を北へ距ること約一里。温泉あり、鹽類泉なり。やゝ連借に同じ。

れんたいじやく 連帶借(名) 法 れんじれんたいじやく 連帶證書(名) 連帶の證書。
れんたいせいさんひ 連帶生産費(名) 二種以上の物品に要せし生産費の、何れに幾何要せしか、判別しがたきもの。
れんたいせきん 連帶責任(名) 連帶の責任。

れんたいせうじやう 連臺借正(名) 人 洛北の連臺寺に住せしことあるよりいふ。東寺の長者寛空僧正の異稱。
れんたいだん 連體段(名) 語 動詞形容詞及び助動詞の語尾變化の排列に於ける、連體形の段。
れんたいちやう 聯隊長(名) れんたいちやう 聯隊野(名) 地 れんたいちやう(連臺寺)を見よ。平雲、上皇、竟に崩御なりぬ。……香隆寺の良(新)蓮臺野の奥、船岡(新)山に收め奉る。

れんたいほじやう 連帶保證(名) 法 保證人が主たる債務者と連帶して債務を負擔する保證債務。債務の履行を請求せる債権者に、先づ主たる債務者に催告をなすべき旨の抗辯(催告の抗辯)又は、檢索の抗辯をなすを得ざる等、普通の保證に比して、一層重き義務及び特別の效力あり。

れんたいむげんせきん 連帶無限責任(名) 法 連帶の無限責任。
れんたいわたり 鞆臺渡連臺渡(名) 旅客を鞆臺に乗せて川を渡すこと。
れんたい 鬪刀(名) 肉を切るに用ふる庖丁。太平記鬪刀に、鐵のまな箸を取り添へて。
れんたい 憐悼(名) 死者をあはれみ悼れんたい 輦道(名) 鳳輦の通路。天子の御車の通路。輦路。
れんたい 戀道(名) こひぢ(戀路)に同じ。若風岳右衛門殿と成り變つて、それがしと、戀道の縁(新)なして賜はれ。
れんたい 練達(名) じゆくたつ(熟達)に同じ。

れんたい 煉丹・鍊丹(名) 晉書の葛洪傳に「從祖玄、吳時學道得仙、號曰三葛仙公。以其鍊丹秘術、授弟子鄭隱」とあり。古、支那の仙術にて、長生不死の薬として、丹砂を煉りしこと。れんまんじゆつ(鍊金術)参照。道家の修養法として、體氣を丹田に畜へ集むること。鍊氣。目なりやく(煉藥)に同じ。
れんたい 煉炭(名) ねりずみ。たどる。石炭代用の燃料。
れんたい 聯彈(名) れんそう(聯奏)を見よ。
れんたい 煉炭製造所(名) かいぜんれんたいせいじやう(海軍煉炭製造所)の略。

れんたい 廉恥(名) 蓮(新)を植ゑてあること。恥づべきを恥づること。
れんたい 廉恥心(名) 恥廉の心。
れんたい 戀著(名) れんぼ(戀慕)に同じ。
れんたい 戀著(名) 佛 諸の外境に戀慕執著して離れざること。

れんたい 廉直(名) 廉潔にして、正直なること。廉正。直の字の音、この場合、正しくはちあんちよ(安直)に同じ。
れんたい 連除法(名) 數 ありあぢよ(累除法)に同じ。
れんたい レンツの定律(英 Lenz's Law) 電 感應電流の方向に關する定律。感應によりて起る電流は、磁石又は電流の運動を妨ぐるが如き方向に流れゆくといふもの。露西亞の物理學者レンツの創唱に係る。

れんたい 廉貞(名) 廉潔にして、守る所あること。貞潔。れんていじや(廉貞)の略。
れんたい 連綴聯綴(名) 連ねつづること、又、連なること。

れんたい 次條の略。二片の板又は藁などにて編みたるものに、繩を附け、これに兩腕を通して、荷を負ふに用ふるもの。れんじやく。連著の鞆(カ) 句 總(新)を横に連ね著けたる鞆。五位以上の者の用ひしものといふ。れんちやく(くり)がい。
れんたい 連著鞆(名) 前條に同じ。
れんたい 簾中(名) れんない(簾内)に同じ。昔の貴婦人の、簾の内にもりあて、席上に姿を現さざりしこと、又その貴婦人。中務内侍日記花山大納言笛等(新)は簾中なり。公卿・大名などの内室の敬稱。
れんたい 連中(名) つれ。なかも。くみ。伴侶。音曲演奏などの一座の者たち。
れんたい 簾中入立(名) 入り立ち(入立)に同じ。
れんたい 簾中鈔(名) 書 歴代の年號を載せ、女院官職、年中行事及び帝王御次第等、その他、上代より元弘年間までの雜事を記せるもの。四卷。藤原實隆の著。一名雲上開錄。に同じ。

れんたい 連除(名) 數 ありあぢよ(累除法)に同じ。
れんたい 連ねつづること、又、連なること。

れんたい 連ねつづること、又、連なること。

れんたい 連ねつづること、又、連なること。

れんたい 連ねつづること、又、連なること。

れんたい 連ねつづること、又、連なること。

れん

れんていじやう 康貞星「名」だいうせい
(大熊星)を見よ。運歩色葉集「康貞星、レ
ンテイシヤウ」

れんてうき 練條機「名」紡績機械の一
梳綿の機より出でたる綿條に、數回の
牽伸を興へ、その太さと重さとを齊整な
らしむる装置。

れんてつ 鍊鐵「名」たんでつ(鍛鐵)に同
れんてつ 輦車「名」輿牛車(牛)の後方の
出入口に設くことありし扉。ひらきま
れんてつ 連弩「名」漢書李陵傳に「發
連弩、射三單于」とあり。一時に多くの矢
を發射し得る弩(弩)也。太平記、數萬艘の
大船を漕ぎ雙(ひ)べ、連弩とて、四五百し
て引きて同時に放つ大弓、大矢を、船ごと
に持たせられたり。

れんてつ 戀重「名」わかしゆ。かげま。
れんてつ 連讀「名」連續して讀むこと。
れんてつ 讀讀「名」連續して讀むこと。
休止せずして讀むこと。

れんとげんくわ レントゲン科「名」診
察治療にレントゲン線を使用する醫術。
えつく光線科。

れんとげんせん レントゲン線(英:Roentgen Ray)「名」理え、レ、す、わ、ら、せ、と、(H
ックス光線)に同じ。

れんとび 連飛「名」輕業の類の演藝
なるべしといふ。雍州府志「連飛、輪脫」開
田耕筆「木をのぼりて、連飛とやらんいふ
事するに似れば、田樂と名づくるのみ」

れん

れんねん 連年「名」としとし(年年)に同
じ。「ること」

れん

れんねん 連年「名」としとし(年年)に同
じ。「ること」

れん

れんねん 連年「名」としとし(年年)に同
じ。「ること」

れんぼ 戀慕 [名] 戀ひしたふこと。ほ

るること。戀愛。戀愛。愛。【一節句

(恋慕)の曲の一。頗る長くして、歌詞を伴

はず。【小唄の節の一。前項の曲の一

部を取れるなるべしといふ。元唄は傳は

らざれども、「小唄總まくり」に「戀慕のか

はり」と題する唄を載す。【四次條の略。

れんぼながし(戀慕流)の略。

戀慕の合方【句】芝居の囃子(ウツ)の

一。尺八入り又は草笛(ウツ)入りなどあ

り。れんぼ。

戀慕の霞【句】戀慕のために亂る心

を、霞に譬(う)ていふ語。傾城反魂香、涙の

霧や戀慕の霞、迷迷朦朧(まぼろし)として

戀慕の熱湯【句】戀慕のために心を苦

しむるを、熱湯を浴せらるるに譬(う)て

いふ語。用明天皇(あすか)の身一つ(みひとつ)の戀

(な)の罪や、數數の岩洩る水の湧きか

へり、胸に漲る戀慕の熱湯】

戀慕の闇【句】戀慕のために智慮を失

ふを闇に迷ふに譬(う)ていふ語。【御痛

はしや、蟬(せみ)は、何の報(う)か、憂

世の闇、戀慕の闇のくらがり。】

れんぼ 蓮歩【名】「金蓮の歩」に同じ。

れんぼ 練歩【名】古、節會(せうかい)の時の作

法として、内辨などの、足を一所に踏み定

めつつ歩みしこと。早練(はやれん)・細練(こ

れんぼ 蓮峰【名】つづきたるみね。連

れんぼ 蓮邦【名】「佛」極樂の衆は、

蓮華を居所とすといふによりていふ。こ

連を圖ること。【練磨】

れんみん 憐愍憐憫【名】あはれむこと。

なきけを掛くこと。れんびん。【じ。

れんみやう 連名【名】れんめい(連名)に同

れんめい 連名【名】氏名を連記するこ

と、又その氏名。れんみやう。【じ。

れんめい 連盟【名】ごうめい(同盟)に同

れんめい 連名状【名】同志の者

の、その主旨を述べ記して、その氏名を連

記したる書状。氏名の下に列を加へたる

は、連列状ともいふ。

れんめい 連名帳【名】連名状を、

冊子に綴りたるもの。列を加へたるは、

連列帳ともいふ。

れんめい 連名投票【名】法選

舉の投票の時、選挙人一人にて、被選挙

人の氏名を、當選すべき者の定數だけ、投票

紙に列記する方法。【單名投票に對して】

れんめい 連綿連條【名】物事の、長く

續きて絶えぬさま。綿綿。

れんものみぐるま 鞆物見車【名】あじろ

ごま(網代車)に同じ。

れんもん 蓮門【名】「佛」れんしゅう(蓮

宗)を見よ【じやうごん(浄土門)の異稱。

れんもん 蓮門教【名】「宗」神道の

一派、日蓮宗の神道化せるもの。本尊を、

事の妙法と呼び、神前にて、事の妙法南無

妙法蓮華經などを唱へ、又中臣(なかつくみ)の歌、

祓祓(はら)などをも用ふ。教祖は長門國

豊浦(とよら)郡岡枝(おかえ)村吉賀(よしか)の農梅本林藏

れんやく 煉藥煉藥【名】藥劑を煉り

て製すること。【ねりやく(煉藥)に同じ。

れんよ 鞆輿【名】てぐるま(手車)に同じ。

れんようけい 連用形【名】「語」動詞形

容詞及び助動詞の、用言の上に連なる時

の形、即ちその語尾變化の第二段の形。

れんようげん 連用言【名】「語」動詞形

容詞及び助動詞の連用形なるもの。

れんようたんとん 連用段【名】「語」動詞形

容詞及び助動詞の語尾變化の排列に於け

る、連用形の段。

れんらく 連絡聯絡【名】續くこと。連

なること。【互に氣脈を通ずること。

れんらく 濂洛【名】「地」次條を見よ。

濂洛關閩の學【句】この學統の祖周

敦頤(とんぎ)は湖南道州濂溪(れんせき)の人、程頤(てい

ぎ)程頤(ていぎ)兄弟は河南即ち洛の人、

張載は關中の人にして、程頤の門に出

て又程頤の門下に揚時あり、朱熹そ

の門に出て、福建即ち閩の地にて學

び、何れも、宋代に於けるこの學の大家

なるよりいふ。又、二程の學を洛學と

いひ、これに、朱熹の學を合せて、洛

閩の學又は閩洛の學といふ。せりがく

(性理學)に同じ。

れんらくせん 連絡船【名】海峡の兩岸

の汽車の乗客を乗せて、その間の交通を

連絡する船。

れんらく 濂洛風雅【名】「書」濂

洛の學派に屬する四十八人の詩を集めた

連理の契【句】「比翼(ひよく)」連理の契しに

同じ。【空(くう)生(せい)の(せい)世(せい)の(せい)魂(たま)の

あだとならんとす。習はしたまふべく

ば、連理のちぎりをなさん】

連理の枕【句】男女の、深き契をこめ

て寝ぬること。

れんりつ 聯立【名】「立」の字の音、正しく

はりよ。【ならび立つこと、又、ならべ立

つること。併立。【「數」・n箇の未知數

を含める。n箇の方程式が、その根(ね)の

一定の値に於て同時に成立すること。例

へば $x^2 + 2x + 1 = 0$ の兩方程式が、 $x = -1$

の値なる時に於て成立する類。

れんりつ さんげんはうていじき 聯立三

元方程式【名】「數」れんりつはうていじき

(聯立方程式)を見よ。

れんりつ たげんはうていじき 聯立多元

方程式【名】「數」れんりつはうていじき

聯立方程式(聯立方程式)を見よ。

れんりつ ないかく 聯立内閣【名】「立

の字の音、正しくはりよ。二箇以上の政黨員

より成る内閣。聯合内閣。

れんりつ げんはうていじき 聯立二元

方程式【名】「數」れんりつはうていじき

聯立方程式(聯立方程式)を見よ。

れんりつ ほうていじき 聯立方程式【名】

「數」【英 Simultaneous equation. 立の字

の音、正しくはりよ。n箇の未知數を含む

て聯立する。n箇の方程式の一群。その未

知數の箇數によりて、聯立二元方程式・聯

れんりつ

